

1 事業名 **さんべ発！！Shoku（食・触・職）の創造プロジェクト**

2 必要性

中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて～青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について～」では、意欲を持ってない青少年の増加が懸念され、体験をとおした試行錯誤や切磋琢磨を見守り支援する大切さが指摘され、その方策として、青少年教育施設を中核として、教育効果の高い体験活動を計画的に提供するよう提言している。中学校を卒業後、高校を中退したり、就職に失敗したりした青年の受け皿は非常に少ない。国立青少年教育施設がこのような青年に光を当て活動の場を提供したり、モデル事業を策定して全国に発信していくことは、ミッションの一つと考える。

本事業は、このような社会的背景のもと、青年が食を通して、多くの「人・もの・こと」との関わりをもち、仲間との試行錯誤・切磋琢磨を通じて自分達の店を出店し、一体感・達成感を味わうことで、社会性を培う教育効果の高い事業である。

3 趣旨

定職に就けず悩んでいる青年や対人関係の苦手な青年が、三瓶周辺の豊かな「食」について知り、地域の人々の温かさに「触」れ、仲間と切磋琢磨しながら食の店を出店することで「職」について考える。このことを通して、青年の行動の原動力である意欲や職業的自立の礎となる社会性を培う。

4 後援

島根県、島根県教育委員会、島根県中山間地域研究センター、ジョブカフェしまね（財団法人ふるさと島根定住財団）、ジョブ・ステーション出雲、松江市青少年支援センター、出雲市子ども支援センター

5 期日

第1回	食を知る	平成21年	9月	4日（金）～	6日（日）
第2回	触を感じる	平成21年	10月	3日（土）～	4日（日）
第3回	職を考える	平成21年	10月	23日（金）～	25日（日）

6 参加者

(1) 募集対象・人数 働くことを楽しみたい、仲間と一体感・達成感を味わいたい、食に興味を持っている、ワクワクドキドキする体験をしたい、いろいろな人と出会いたいなどの希望を持っている学生や青年（ニート・フリーター・ひきこもり傾向にある青年を含む）

20人

(2) 参加人数	第1回	食を知る	37名（28名）	+	相談員4名
	第2回	触を感じる	29名（24名）	+	相談員1名
	第3回	職を考える	25名（20名）	+	相談員3名

()内は、ニート・フリーター・ひきこもり傾向にある青年の参加者数

(3) 参加者分析 平成19年度、20年度に参加した青年たちが多く参加した。その青年達は今まで参加して学んだ体験を活かそうと意欲的に取り組んでいた。

また、その他の青年たちが参加したきっかけは、信頼している相談員の方からの強い勧誘や友人からの誘いがほとんどであった。

(4) 参加地域 島根県42名

7 参加経費

第1回 2,650円

第2回 1,490円

第3回 2,540円



さんべ祭終了後、参加者の笑顔は達成感に満ちていました。

8 講師

大西 勝 氏 (絵本講師)

川村 千里 氏 (和牛生産農家)

宮本 英治 氏 (ペンションのオーナー、紅茶研究家)

奥村 和也 氏 (カフェのオーナー、ミュージシャン)

9 事業の内容

(1) 事業の特色

- ・本事業は、青年が食を通して、多くの「人・もの・こと」との関わりをもち、仲間との試行錯誤・切磋琢磨を通じて自分達の店を出店し、一体感・達成感を味わうことで、社会性を培う教育効果の高い事業である。
- ・地域のこだわりの食や生活文化・人材に触れ、体験活動を通じた学びを活かし、発表の場として多くの人が訪れる「さんべ祭」に、食の店を出店を企画・実施したものである。
- ・出店の企画・実施をとおして、問題解決能力・合意形成能力・コミュニケーション能力を高める参加型事業である。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

- ・平成21年度が事業の最後であることから、継続してきている参加者が平成20年度までの経験を生かしてよりよい祭を築くことも意識した。平成22年度はこのようなプロジェクトがなくても、参加者が自らの意思で声を掛け合い、祭に出店できるように促した。
- ・地域のこだわりの食や生活文化、人材に触れ、体験活動をとおした学びを生かし、施設開放事業でもある「さんべ祭」と連携をして出店を企画・実施した。
- ・出店の企画・実施をとおして、問題解決能力、合意形成能力、コミュニケーション能力を高める参加型事業として実施した。
- ・3回シリーズ企画にすることで、参加者同士が回を重ねるごとに親しくなり、事業後も人間関係が

継続することをねらった。また、1回目・2回目で学んだことを出店の際に活かすことができるプログラム構成にした。

- ・3回を通して青年たちの相談員4名を迎え、青年たちが安心して事業に参加できる体制づくりに力を入れた。

(3) 広報のポイント

- ・ ジョブ・ステーション出雲やジョブカフェの相談員等関係機関の方々に本事業の趣旨を説明し、相談に来ている青年たちを勧誘してもらうようお願いをした。
- ・ 近隣の関係機関に直接訪問をし、本事業の趣旨を説明することで相談に来ている青年たちを勧誘してもらうようお願いをした。
- ・ 報道機関に対し事業の取材依頼を各回ごとに行った。

(4) 日程表

第1回「食を知る」プログラム

9/4 (金)	14:00	14:30	15:30	17:00	19:00	20:30	23:00
		受付	オープニング アイスブレイク	自然に笑顔になる スナッグゴルフ	つた ど い食	楽しい! 読み聞かせ	入 就 浴 寝

9/5 (土)	6:30	9:00	15:00	16:00	18:00	20:00	21:00	23:00
	起つ朝 ど 床い食	ピザ釜作り カレー作り	放牧牛との 感動体験!	放牧牛の 世話	夕休 食憩	ナイト ウォーク 星空観察	入 就 浴 寝	

9/6 (日)	6:30	9:00	10:30	11:30
	起つ朝 ど 床い食	SAP (Sanbe Adventure Program) ~仲間づくり~	ふりかえり わかちあい	解 散

第2回「触を感じる」プログラム

10/3 (土)	14:00		14:30	15:00		17:00		19:00	21:00		23:00	
		受付	アイスブレイク オープニング	ニュースポーツ体験 (ドッチビー・キンボール)		つた ど い食	さんべ祭出店 打ち合せ		入 浴	就 寝		

10/4 (日)	6:30		9:00	10:30		12:30		15:30			
	起つ朝 ど 床い食	・地元の方と料理教室 ・おいしい紅茶の入れ方セミナー (志学中学校)			・講師の生ライブ ・ふりかえり わかちあい (ライブカフェ岳人)		解 散				

第3回「職を考える」プログラム

10/23 (金)	14:00			17:00		19:30	21:30		23:00	
		受付	流れの確認・ 出店準備		夕入 食浴	ミーティング 明日の準備		就 寝		

10/24 (土)	9:00		11:00		16:30		19:30	21:30		23:00	
		出店準備		さんべ祭 出店		夕入 食浴	ミーティング 明日の準備		就 寝		

10/25 (日)	6:30		9:00		15:00		16:30				
	起朝 床食	さんべ祭 出店			ふりかえり わかちあい		解 散				

(5) 運営のポイント

- ・本事業の企画・運営・評価を適切に遂行するために実行委員会を設置した。実行委員には効果的な広報や参加者の勧誘、三瓶周辺の地域情報など様々な助言をいただいた。
- ・様々な関係機関の相談員の方々との連携を通して、本事業の課題（広報のあり方、特定の状況にある青年たちのサポート、地域の方々との連絡調整、継続参加者と新規参加者との連絡調整等）を克服することが出来た。また、関係機関同士の連携により、特定の状況にある青年たちへの手厚いサポート体制があり、就業等に結びついている。
- ・参加者の様子や変化をみながら、担当企画指導専門職と相談の上、プログラムの順番等を柔軟に変更した。

- ・オープニングは特に参加者が不安や緊張を抱えていることを考慮し、音楽を流したり、机の位置を変えたりと参加者がリラックスできるよう努めた。

(6) 安全管理のポイント

- ・特定の状況にある青年たちをサポートする相談員の方や支援をしている学生ボランティアが本事業に参加され、きめ細やかな配慮をして下さったことが青年たちの安心・安全につながった。
- ・事業当日にはスタッフミーティングを毎晩行い、その日の事業のふりかえりをするとともに、青年たちの心身の状況をスタッフ全員が共有し、次の取り組みにつなげたことが参加者の安心・安全につながった。

(7) アンケートの主な記述

- ・暇つぶしに参加してみようと思っていたが、いざ参加してみると暇つぶしどころか興味が沸いてきてとても楽しかった。
- ・人と話すのが苦手な上に、参加者に仲のよい人がいなくとても不安でした。しかし皆さんにとっても優しく接してもらいうれしかった。
- ・いろいろな人と出会えたのが楽しかった。次に会うときは、もっと多くの人と話して仲良くなりたい。
- ・仕事は大変だと思うが、牧場に興味が沸いてきた。
- ・これからの人生大変なこともあるけれど長い人生精一杯生きていきたい。
- ・夢に向かっていくには簡単ではなく努力が必要だと教えてもらった気がした。私も頑張ろうと思った。
- ・さんべ祭では、利益を上げられるよう頑張りたい。それから自分の目的はそれなりに達成しつつあるのではないかと思う。
- ・知らない人や得意じゃない人と関わる大切さを学んだ。
- ・自分の夢をあきらめない大切さを改めて気付いた。
- ・みんなで力を合わせてできたことがよかったです。準備等大変だったけど、楽しい時間が過ごせました。
- ・自分だけでたいへんな面もメンバーで助け合うことが出来たからだと思います。
- ・回を重ねるごとに、いろいろな人と話すことができたり、仲良くなれたりして、楽しかったです。
- ・生きていく上で、とても大切な事(人とのふれあい・人とのかわりかた)を学べたと思いました。
- ・周りの人達が回を重ねるごとに、交友が深められていくのを強く感じました。
- ・人は人にたすけてもらわなければ生きていけないんだなと思いました。

10 成果と今後の課題

<成果>

- ・事業が進むにつれ、表情に変化がなかった参加者に笑顔がみられたり積極的に事業に関わろうとする姿がみられたりするなど多くの変容が見られた。
- ・平成19年度、20年度と継続してきている参加者が初めて参加する青年をサポートする関係を築くことができた。
- ・特定の状況にある青年だけでなく、ボランティアとして参加した学生からも「人が変容する様子を見ることができ貴重な体験ができた」、「人と人の関わり方について勉強になった」などの声が寄せられ、大きく影響を与えた。

- ・平成21年度の参加者の間で、三瓶で同窓会を開きたいとの声があり事業終了後の4ヶ月後の現在、計画中である。
- ・事業後も関係機関同士の連携により、参加者への手厚いフォロー体制があり、就職等に結びついている。(具体例：コールセンターへ就職1名、和紙業者へ就職1名、ポリテクセンターへ通学1名、花屋のバイト1名など)

<課題>

- ・本事業は原則3回シリーズのものであり、3回参加して教育的効果が上がるものである。しかし、事業の趣旨を充分理解していない参加者もあり、継続して参加している参加者に混乱を与えてしまう可能性も考えられるため、次回からは事業の趣旨をしっかりと把握してもらい参加者を募りたい。
- ・事業だけで終わらずに、今後も当施設を拠点に参加者が集まる機会を設け、参加者の交流の場としたい。

1.1 普及計画・普及実績

- ・事業報告書を作成し、全国や県内の青少年教育施設、青少年支援センター等の関係機関に配布する。また、ホームページに本事業の報告や成果を掲載する。
- ・本事業の実際について、プレゼンテーション用ソフトウェアを活用してまとめ、関係機関等に積極的に出向きプレゼンテーションを行う。

(担当 楫 絵里子)

第1回「食を知る」



目の前に広がる雄大な三瓶山を眺めながら、
思いっきりスイング!



牛の世話を黙々とする青年

第2回「触を感じる」



地域の方と一緒に試作品作り。
たくさんのことを教わりました。



講師の話が終わった後も、
いつまでも熱心に耳を傾ける参加者たち



大きな声で売り込みをする参加者。



さんべ祭フィナーレでは、
参加者同士の友情が芽生えていました。